

お金は誰にとっても重要な問題だが、語り方には注意が必要だ。少し間違うと「金もうけ主義」、「守銭奴」といった人格否定的なことまで言われる。

日本人のお金観は微妙だ。「宵越しの銭は持たぬ」という江戸っ子の気風は、お金に執着する生き方を汚いと捉える。一方、関西では「もうかりまっか？」とざっくり聞いてくる。お金に対して正直な向かい方だ。

日本を代表する財政家であった高橋是清は、日本人が過度にお金を汚いと思ったり、拜金主義に走る両極端を批判した。お金に対する適切な距離感を持って、ということだ。言ってみれば、「中庸お金観」である。

お金に対する大人たちの愛憎半ばする思いを反映して、これまで子どもたちにお金について学校では上手に教えるのは難しかった。

現実には、金銭感覚のなさで身を持ち崩す人は多い。ブランド品をむやみに口ーンで買って首が回らなくなり、体を売るといった本末転倒な事態が進行した。「援助交際」といったあいまいな表現で、お金と何が引き替えにされているかがごまかされてきた。

儉約家の教え

齋藤 孝

私は、『ちょっとお金持ちになってみた人、全員集合！』（PHP研究所）という本で、子どもたちにお金のことを語った。

キーワードは「信用」にした。お金はきちんと働かなければ手に入らない。働いて信用を積み重ねていけば報酬も上がる。しかし、一旦信用を失うと誰もお金をくれない。お金を借りる時も信用が必要だ。

「親が懸命に働いた成果がお金なのだ。それで生活できてるのだ」ときちんと子どもに教えないと、子どもがお金をなめることになる。お金をなめていると学校の勉強も手を抜くし、働くことを真剣に考えなくなる。

私自身は子どもの頃から不思議と儉約



絵・江口修平

家だった。靴は穴があくまではき、無駄遣いしないで貯蓄した。貯めること自体に喜びがあった。家族が浪費家だったので、家のお金がなくなった時のことを心配して、家のあちこちに数百円ずつ隠しておいた。

こうして二十数年かけて貯めたお金をバブル崩壊直前の間抜けな時期に株につきこんで失うことになるうとは、二宮金次郎のような儉約少年には想像もつかないことだった。

子どもには「お金を甘く見ると痛い目に遭う」ことだけは伝えておきたい。二宮尊徳は儉約家から財政再建家へと、スケールアップしていった。まずは儉約が余裕を生み、効果的なお金の使い方につながるのだと教えていきたい。

さいとう・たかし●明治大学文学部教授。1960年静岡県生まれ。専門は教育学、身体論、コミュニケーション論。『身体感覚を取り戻す』（新潮学芸賞）、『声に出して読みたい日本語』（毎日出版文化賞特別賞）など著書多数。近著に『人間関係力～困った時の33のヒント』。

